



第33回 全国読書作文コンクール 優秀作品集

小学生5点・中学生4点

公益社団法人全国学習塾協会

令和五年度 第三十三回 全国読書作文コンクール

小学生の部・大賞

裏側にあるもの

小 椋 亮 豪 (小四)



世間には自分勝手だと思われる人がたくさんいる。でも、なぜ自分勝手だと思われるのだろうか。それは、多くの人がその人のかぎられた一面しか見ていないからだと思う。

翼は、自分が正しいと信じきっていた。そして、同じクラスの生徒に対しても自分の気持ちを全く理解してくれない嫌な人達だと思っていた。しかし、親せきのいる鹿児島県の垂水に行った事により、色々な見方があると分かるようになってくる。まずは、健一じいちゃんとした将棋の対決だ。将棋というのは自分の駒をどう動かすかによって相手の動きも変わってくる。相手の色々な動きを予想して、動かさなければいけない。つまり、相手の色々な面を見なくてはいけないということだ。ぼくも、人の悪い面だけを見てその人を決めつけてしまうことがある。ぼくの同級生に、いつも人の悪口や人の嫌な事をしている子がいる。ぼくもごみを投げられたり、けられたりした。その時ぼくは、とても腹が立つ

て、「ゆるせない」「どこかに行ってしまったばいのに」などひどい事を思ったりした。でもある日、弱った犬にやさしくごはんをあげていたり、小さい子供のお世話もしたりしていた。その時ぼくは、はっとした。その子の悪い面の裏には、良い面がかくれていたんだ。クラスのみんなはその子の事を「悪い子だ」と言う。でもぼくはその子のちがった面を知ったので、みんなと同じ考え方はしない。

次に、まいちゃんとの自分を変えるきっかけになった話だ。自分を正しいと思いきつむ事は良い面もあるし悪い面もあると思う。人の話を聞く事で、気付く事もたくさんある。よく母に弟とけんかをした時に「ぼくが正しいんだ」という感じで話をする事がある。しかし母は「そうなのね。でも、あなたの悪い面はなかったの」と聞いてくる。そして、弟の立場になって話もしてくれる。そうすると、自分の態度や言い方が悪かったと気付くことがよくある。自分を相手の立場におきかえる事で、自分をちがった見方で見れるのだ。

人には、様々な面がある。これは大人になっても決して忘れないでほしいと思う。テレビをつけると、ある一面を取り上げて、その裏側はかくされたままにされている事が多い。身の回りにはこんな事がたくさんあると思う。ぼくは、大人になるにつれて、色々なことを知る事になると思うが、たくさんの方から、たくさんの方の面を見ていけるようになりたいと思う。

大賞へ、審査員のひとこと

「裏側にあるもの」という題で、まさにこの作文のテーマをタイトルにしてくれておりますが、「びわ色のドッジボール」を読んだことから、自分の体験を振り返るということが出来ていて、具体的にクラスで悪い子と思われている子が実はやさしい面を持っているとか、具体的なことを本から触発されて述べていて、かなりきちんとした例になっていて、人には様々な面があるという結論に、本と交流しながら、適切な体験の例を挙げながら結論に達している。尚且つそれを、大人になってもけっして忘れないうと、自分に確かめるところまで書かれていて、頼もしい四年生です。

小学校四年生で、「裏側にあるもの」というタイトルがすごいです。また、タイトル通り、しっかりと裏側を見ようとしている。とても大事なのが、裏側と言いつつ、裏側がひっくり返るといふか、裏側が表になってしまうというところが、とても大事な事。裏側が裏側のまま終わってしまうのではなく、裏側をなんとか表にしようとする、力強さをとても感じました。これが、見事に裏切らないで、大人たちに具体的にを見せてくれたという、大人への挑戦と思うくらい良い作品でした。

受賞者のひとこと

お風呂上がりのお茶を飲んでいる時でした。母に「大賞をとったよ。」と言われ、ぼくは「本当なのか、ぼくが本当に大賞をとったのか。」という信じられない気持ちでいっぱいになりました。

実はこの本の感想文を書くとき、自分の思いをどう言葉にして書けば良いか悩み、何度か泣いてしまいました。自分の思いを書き表すのはとても大変だと思います。ぼくは幼いころから本を読むのが大好きです。この先もたくさん本を読んで自分の思いをうまく表す事が出来るように「言葉のちよ金」をためていきたいと思えます。泣きながら書いたけれど、この素晴らしい本を読むことによって「言葉のちよ金」を増やすことができ、自分の気持ちを書き表すことも上手になりました。

大賞という素晴らしい賞をありがとうございます。これからも、大好きな本をたくさん読んで自分の思いや気持ちを上手に伝えられるようになりたいです。

小学生低学年の部・最優秀賞(小二)

みんなにあげたい金メダル

恒成 里南



人はみんな、目には見えない金メダルをもっている。わたしは思っています。

とくいなこと、にが手なこと、それぞれありながら、生きています。

とくいなことをもつともつとのばして、いこうとど力している人、にが手なことをこくふくしようとしてど力している人、わたしのまわりにはたくさんいます。

そして、じ分とちがうからといって、おかしいな、へんだな、と思ったり、言ったりするのはぜったいに間ちがっていると思います。

人には、こせいがあって、みんな同じではなく、ちがっているからこそ楽しいせかいになっている。いつも考えています。

それは、体つきなどの見た目だけではなく心の中で考えていることや、行どう、すべてちがってあたり前だと思えます。

「おかあちゃんにきんメダル」この本の中に出てくるよしおは、ともだちのおかあさんのことをうちゅう人みたいだと言いました。

それはとてもひどい言葉です。だけどそれは、よしおがじ分とちがう人があるということを知らないことがもんだいだと思えました。

「知らない」ということは、まわりの人をきずつけることもありません。

わたしのおかあさんはよく、「せかいは広いよ。いろいろなものを見

て、聞いて、ふれて、頭と心にえいようをあげようね。」と言っています。おかあさんこの言ばのみが少し分かった気がします。

じ分だけをきじゆんにしてものごとを見てみると、いつの間にかじ分だけが正しいと信じこんでしまうそうです。そうならないためにも、たくさんのごとを知ると力をわたしはしようと思っっています。そのため、ニュースをまい日見て、せかい中でおきているさまざまなおきごとを知り、分からないことはしらべています。

よしおのいいところは、じ分が間ちがえたと分かったらすなおにあやまれるところです。

大人でもなかなかすなおにあやまることができない人もいると、前に読んだ本に書いてありました。

あやまらずにどうやって仲なおりするのかわかりません。いじをはらずにあやまって、わるかったところをはんせいして、まわりの人たちとよいかんけいをきづいていきたいです。

「ぼく」もおかあちゃんをきずつけたことをあやまりました。おかあちゃんは、きにせんでええよ、と言いながらも、「ぼく」が大切なことに気づいたことがうれしかったんだと思います。

わたしはこれからも、目には見えないみんなの金メダルをたくさん見つけることができるような人でありたいと思います。

対象図書名 おかあちゃんに きんメダル！

受賞者のひとこと

今回は、このような大きな賞をいただいてありがとうございます。

はじめてのさく文コンクールでしたが、じ分の気もちや考えを思いつきり書くことができました。

何ども何どもくりかえし本を読み、文しょうを組み立てていくのはとても

も楽しかったです。

わたしは、文を書くことが好きで、日記をつけています。日々の出来ごとを書くだけではなく、かんじたことやいんしょうにのこったことも書くようにしています。

さく文コンクールは、本のかんそうのみならず、じ分の考えをじゆうに書くことができ、書きおわった時には気もちが晴れわたりました。

うまく言葉にしてあらわせない時もありましたが、その時間も楽しめました。

ころからもたくさんのお本と出会い、じ分とむきあって生きていきたいです。

小学生の部・最優秀賞(小四)

大切な命

渡邊 詩大



「子どもは作らんよ、育てれんと思う。犬の世話もちゃんとできんし。」少し前将来の話をしたとき、ぼくはお母さんにこう言った。最近パソコンを持ち帰る宿題が多くなったので、タブレットの中で命を育てるタブチルの話はあのとときの会話を思い出す興味深い話だった。

生まれてから九年しか経っていないぼくも、一度だけ大切な命との別れを経験したことがある。かわいがっていた愛犬が突然朝起きたら亡くなっていたのだ。会いたいと思っても会えないし、二度と触れることもできない。命が亡くなるということは、たとえペットだとしても悲しくつらい気持ちになることを知った。キリエの子どもが亡くなって悲しむ姿はあのとときのぼくと同じでぼくも悲しくなった。

育てることは大変なことだと思う。新しい命を迎えた今、「犬の世話

「もちやんとできない」とぼくは思っている。大切な命との別れを経験して悲しかったのにできていないと思っている。でもそれは違った。ぼくは毎日犬と遊んでいる。ハウス掃除もしているし、お姉ちゃんに任せきりのことも多いけどごはんもあげている。タブレットの協力して子育てをする姿から一人で世話をすることだけが育てるではないんだと気付いた。

よく考えると、ぼくもいろいろな人に育ててもらっている。家族はもちろん、おじいちゃんおばあちゃんに教えてもらうこともあるし、学校の先生、友達、習い事の先生、たくさんの人と関わって成長している。一人では大変なことも、それぞれができることを協力してやれば良い。

そう思うとぼくも将来子どもを育ててみたい気持ちが出てきた。人も動物も亡くなった命は戻ってこない。大切にしている物だつて壊れてしまうと直せない物もある。失った物は戻ってこない、そう思うと悲しいけど、そうならないために、失うまでの時間をのばすことはできると思う。人も動物も物も、限られた命を大切にするにはどうすればいいだろうと考えてみた。そして優しい気持ちが大切なんじゃないかと思った。

この本の中に、自分を守ることと相手を傷つけることは表裏一体という言葉があった。相手のことを思わない自分の気持ちをぶつけるだけの言葉は人の心を傷つけると思う。反対に相手を思う優しい気持ちで伝える言葉は人を安心させる力があると思う。心が傷ついて病気になったら人は亡くなってしまうこともあると前にお母さんに教えてもらったことを思いだした。

ぼくはこれから身の回りの物やペットはもちろん、今周りにいる人やこの先出会う人、ぼく自身の限られた命が一日でも長く続くよう優しい

気持ちを大切に過ごしていきたい。

対象図書名 タブレット・チルドレン

受賞者のひとこと

ぼくは本を読むのが好きで、いつもたくさん本を読んでいます。去年読書感想文で優秀賞をいただいて嬉しかったので、今年も選ばれたらいいなと思って頑張って取り組みました。自分で選んだ本を何度も読み、考え、感じたことを表した感想文が、今年は去年を上回る最優秀賞を受賞したと知ったときはとても嬉しかったです。これからもたくさん本を読み、いろいろなことを感じたり考えたりすることを楽しみたいです。素敵な賞に選んでいただきありがとうございます。

小学生の部・最優秀賞(小五)

子育てを人工知能で行うこととは

山本 希笑



本を選ぶ時、「タブレット・チルドレン」はタブレットをする自分たちの今のことと思つた。しかし、中身は想像から全くちがいで、なんとタブレットで子育てすることだった。

この本は、タブレットの中で人工知能の子

もを育てていく話である。子育てを中学生がするとは、興味がわいたが、想像できない自分に正直とまどつたのが本音だった。

読み始めると、まだ知らない中学生たちの心の中や、それを平気で言葉にしきずつくの考えない中学生たちが出てきたが、想像ははまるでわたしの今のクラスのように見えた。

想像することは心で生きるが、言葉にしたら霊となると法事で聞いたことを思い出し、自分を支えている姿を頭にうかんでいる。

そこで、中学校生活でどう自分を支えていけるかと考えながら読むことにした。

そう考えていたら、ズバズバ思ったことを言うタブレットの中の小学生マミが出てきた。

マミは思ったことを全て言葉にする子だ。

マミのズバズバ言うことを読めば読むほど学校では言うもんかとかまわしているわたしはうらやましいと思った。マミのようになれたらスッキリするのかな、でもだれかを必ずきずつけてしまうんだろうなと頭の中でこの二つの思いがまわっていた。

マミの言葉に、「もういい。お母さんと話しても、意味がない」とある。わたしは母に言うう気もないし言えないと思った。でも、マミと同じように思っている子どもは近くにいないかもしれない。わたしは母に「親には本音をぶつけていい。」と気持ちを整理できないころにアドバイスをもらった。信じてみたら心の整理ができるようになった。

言葉を伝える事にはたし算引き算が必要とわかるようになった。

マミは相手が親だから言ったのだろう。でも、人工知能だから「ごめんなさいお母さん」とあやまるのも早くて、うらやましいと思った。

もう一つ印象に残ったのは本の最後にある「お母さん、わたしのこと、愛してる？」というマミの一言だ。

わたしは母に聞いてみたら「わたしもバアバに聞きたかったな。でも空でも見守ってるだろうから愛を感じるよ」と答えてくれた。出産が大変だった母は私が無事に産まれた時は本当にうれしかったし、今も幸せとほずかしそうに答えてくれ、わたしは言葉にできない幸せを感じた。

この本を読んで、マミのようにはっきり言える強さを少しずつよいから身につけたいと思えた。もしかしたら近い未来、わたしもタブレットで子育てを体験するかもしれない。

でも大切な事は、伝える言葉には、たし算引き算が必要で、思いやりを忘れない事だ。

それはきつと生きていく中でいつも課題であろう。

受賞者のひとこと

対象図書名 タブレット・チルドレン

最初に、評価くださった関係者のみなさん、いつもあたたかく見守ってくださっている塾の先生方、ありがとうございます。

初めて参加した昨年は「特選」をいただき、読書感想文をもっとがんばろうと思ったのを覚えています。

今年は、読み手は「おとな」、でも作文を書くわたしは「小学生」であることを大切にして、賞を意識することなく取り組みました。

「最優秀賞」の連絡をいただいた時、とてもうれしかったです、まだ信じられない気持ちにまつまれます。でも真剣に本と自分と向き合ってたよかったです。

読書感想文を取り組む人が増えたらいいなと願っています。この受賞で勇気もらえました。

本当にありがとうございました。

小学生の部・最優秀賞(小六)

私の選択と一手

時信 瑠果



私にはどんな選択が出来て、どんな一手が打てるだろうか。幼少期は、みんな好き勝手な事を言ってもやってもさほどの事でなければ受け流して過ごすことが出来る。でも、少しずつ「考える・感じる」と言う能力を身に付けてきたとたん、特に友達関係がややこしくなつて心がざわざわしはじめる。

時にそれは、友達だけが悪いのではなく私がきっかけを作っている事もある。私は歯科矯正をしている。この事はなるべく友達に知られたくない。でも唯一私が矯正をしていることを教えた友達に「歯科矯正って大変そう」とばかにされたように言われ私は裏切られた気分になった。相手は、悪気があつて言ったわけではないのかもしれないが、私はむしろように腹が立った。だから「歯並びがいい人には私の苦勞は分からないよ」と言ってしまった。その日から私は一人ぼっちになって学校に居場所がなくなった。

そんな時、担任の先生が「何かあつた？お友達と一緒に居ないけど大丈夫？」と私に寄りそう言葉をくれた。その言葉は私にとってすごく気持ち落ち着き、手を差し伸べてくれる人がいることに安心した。友達と仲直りする為に色々な選択を考え行動に移した。まずけんかをした友達と手紙でやりとりをした。次に先生に話しを聞いてもらった。後は何も考えずに読書をしたりして自分の気持ちを整理した。この選択で友達

と向き合つて話しをする事ができた。ここまでくるのにたくさん悩み色んな選択を考え自分が一番いいと思つた一手で友達と仲直りする事ができた。

最近、将棋のタイトル戦のニュースを見た。プロの棋士は数十手先まで読んで挑む事を知つた。物語の中で、翼は祖父に将棋の仕方を教えてもらつていた。「自分がどう動けば相手がどう動くか、考えながら駒を動かしていく」という事だ。それは私と友達との向き合い方も同じではないかと感じた。考えずに言葉を発したり態度に表したりしないで数手先を読んで行動すれば友達の仕事や周りの事にも気付けるのだろう。

生きていると日々たくさんの選択にせまられてその一手に悩む事もある。自分で見つけられない時は母に頼ると色々な選択と一手を用意してくれる。「もし学校に行けなくなつたら青空教室を探してあげる」や友達の仕事では「みんな必ず好きになる必要はない」と言つて選択の幅を広げてくれた。子供や大人のご概念で選択するのではなく人としての選択と一手を打てたらいいという事だ。

その一つ一つの選択や一手は自分で考えたり探したり時には「誰か」に頼つてもいいのだ。「誰か」がいる事で伝えるべき言葉や行動に移す力を得るのだと思う。私は「ありがとう」と「ごめんなさい」は早く相手に伝える一手を持つている。これからは私のスペシヤルな一手を見つけて使つていきたい。

対象図書名 びわ色のドッジボール

受賞者のひとこと

私の第一声は「えーっ」でした。二年連続「最優秀賞」に選ばれ、とまどいと驚きと喜びとで色々な感情がミックスされました。でもしばらくし

てジワジワと嬉しさがやってきました。

読書作文を通していつも私自身のことを振り返る事ができているような気がします。文章に思いを乗せる事で気持ちを再確認していたのだと思います。改めて言葉にする事で、「こんな自分になりたいな」とか「こんな所がダメだな」とか「こんな世の中になったらいいな」と気付かされます。今後新たな発見につなげていきたいと感じました。

文章の力を借りて、なりたい私に近づけるようにしていきたいです。

中学生の部・大賞

挑戦の先にある成長

高橋 にこ (中三)



長が待っているだろうか。

私は今年の夏、市の姉妹都市訪問で約二週間、ニュージーランドでホームステイをした。バディと四日間学校へ通ったり、観光をしたりした。海外へ行くのは人生で二度目だった。だが、家族と一緒にいないということがとても不安だった。前回、家族とオーストラリアへ行ったときには、何か分からないことがあれば日本語で話せる家族がいたから安心できた。でも今回は何かあっても私一人だけ。助けしてくれる人は英語しか話せないという当たり前のことが不安だった。

私は英語が好きだし、得意な方だ。だからネイティブと話すことを少し甘く見ていた。自分の英語はネイティブに伝わり、自分はネイティブの英語を聞き取ることができると。

だが、実際はそんな理想とはかけ離れた現実が待っていた。ニュージーランドの人々にとって英語は母国語だ。だから当たり前だが話すスピードはとても速いし、知らない単語はたくさんあるし、ニュージーランド特有の訛りもある。そのため、簡単な質問でも答えられず、固まってしまうことがよくあった。言語の壁だけでなく、文化や生活環境の壁な

ども大きかった。当然、すぐに慣れることはできなかった。ホストファミリーと生活し始めてからの一週間はホームシックと戦っていた。日本の家族や友達、日本食、日本のあらゆる物が恋しくなった。その度にたった二週間も海外で生活できないのかと自分を責め、一人で泣いてしまうこともあった。自分には海外は向いていないから日本に帰りたいたいと思ったことさえあった。もう無理なんだと自分で自分を悪い方向に持っていくようとしていた。

だが私はそんな弱く、腐った考えをしている自分に勝つことができず。それは学生時代オーストラリアでホームステイをしたことがある母のおかげだった。母は私になぜここに来たのかということを出させてくれた。私の寂しい、不安という感情は今だけのものであり、本来は英語を上達させたいと思ってここまで来たのだ。この経験をするという選択は間違えていなかったと教えてくれた。陽希さんの中学校のときの担任の先生のように。

「自分が選んだ道を信じて後悔するな」という言葉が、陽希さんのアドベンチャーレースという道を支える存在になっている。陽希さんが進路に悩んでいたとき、心の中でいろいろなことを考え、迷った。そんなとき、アドベンチャーレースの世界に出合い、その途端本当の自分のやりたいことを見つめることができ、モヤモヤしていた心が晴れた。これまでとは変わり、アドベンチャーレースだけに向かって突き進んでいった。

私も母のおかげで自分の現状は間違っていて、無駄な感情が自分の目的を邪魔していたことに気づくことができた。残りの一週間は今までとは変わり、文法がぐちゃぐちゃでも発音が上手くなくてもいいから、恥ずかしながら積極的に会話をしようと試みた。だけど伝わらないこと

も多かった。そのときはやっぱり悲しかったけど、この経験が将来の自分の糧になるかもしれないと思い、頑張れた。するとだんだんとニュージージーランドを離れたくない、もっとここで生活したいという気持ちが芽生えるようになった。相手の言っていることが少しづつ理解できるようになり嬉しかった。ここまで成長することができたのは、自分が英語を話せるようになりたい、英語で世界中の人とコミュニケーションをとりたいという目標がはっきりとあったからだと思う。

陽希さんはどんなことがあっても「絶対ムリ」と言わず、前向きに頑張りを続けることで「日本百名山ひと筆書き」に続き、たくさんの方を成し遂げた。私もホームステイ中に不安や寂しい気持ちが邪魔をして、本来の目的が分からなくなっていた。だけど、自分の目的を思い出すことで自分自身を前向きな気持ちにし、二週間のホームステイを楽しく終えることができた。

何かを達成しようとするときには、自分の目的・目標を明確にし、自覚を持って行動することができれば弱い感情に左右されることはないのだと気付いた。これから先悩んだり迷ったりしたときには、自分がどうしたいのか、どうなりたいのかを一度立ち止まって考えて、真っ直ぐと自分の目指すゴールへと進んでいきたいと思う。挑戦の先にある成長を手に入れるために。

大賞へ、審査員のひとこと

二週間ニュージージーランドへホームステイに行つて、ホームシックになつてしまふが、乗り越えてホームステイを全うしてきたお話なのだが、実際読んだ本は「山を歩く」という、がんばり・挑戦の内容だけれども、ホームステイのなかの自分の挑戦があったということ、それに重ねて書いて

対象図書名 それでも僕は歩き続ける

いるところが、とてもよかつたし、具体的に良い作文でした。「挑戦の先にある成長」というタイトルですが、普通この本を読むと、自分が肉体を使つてやっていることに對して直線的に向かうことが多いが、ニュージージーランドのホームステイの体験を思い出して、不安感・孤独感、英語しか話せないつらさなんかを思い出すという、この本で、肉体系ではなく、文科系を思い出すという、こういう読み方があるんだと、教えていただいた。

文章の余裕が見える、まだまだ、もっと良い文章が書ける、懐の深さのようなものを感じました。今は、英語がうまくなっているのでは、ないでしょうか。

受賞者のひとこと

この度はすばらしい賞をいただき、ありがとうございます。受賞の話を聞いたとき、あまりの嬉しさと驚きで頭がいっぱいでした。私は小学三年生の頃から毎年作文を書いてきました。何度か作家審査まで行けたものの、今回ほど大きな賞を受賞することはできませんでした。そして今回、最後の年で大賞を受賞することが出来、大変光栄です。

読書作文は私のホームステイの体験についてでしたが、その後ニュージージーランドからバディが来日し、私の家でホームステイをしました。当時と逆の立場になってみるとことで違った角度から物事を考えることができるようになったと思います。ホームステイという経験とその中で心の葛藤はこれからの人生において非常に大切なものになると信じています。

中学生の部・最優秀賞(中一)

自分自身と向き合つて

相田 あづき



自分の名前が好きかと聞かれたら、今私は、はつきり「好き」と答えられる。両親や祖父母、たくさんの方の思いが込められていることを、今回「マイネーム」を通し

て改めて感じて^るいるから。自分の名前は自分だけの特別なものだ^と今からはつきり言える。

小学生までの私は「あづき」という名前のせいで、何度もからかわれてきた。特に給食に小豆が入っていると、決まって「今、あづきが小豆を食べています」と、誰かが実況を始める。「あづきさん、小豆の味はどうですか」と他の男子も調子に乗る。そこでクラス中に笑いが起こる。また始まったかと私はそのたびに不機嫌になっていた。人の名前だからかったりして何が面白いのかと、いつもうんざりしていた。あの頃の私なら間違いなく「星の名前」のメンバーに入っていただろう。そして、誰にもからかわれたりしない、ごく普通の名前を名乗っただろう。自分が呼ばれたい好きな名前^の名札をつけることに、私も積極的に賛成したと思う。

学校側から突然、「さんづけ」を強制されたことで、みんなはもともと自分たちの気持ちを尊重してほしいと思っただけに違いない。私は以前、「さんづけ運動」を実施している学校の様子をテレビで見たことがあった。インタビュで子供たちが「呼び捨てやあだ名よりさんづけの方が気持ちがいいです。」と答えていた。その時私は、これは本心なのかと疑った。相手に対して尊敬を表すものだというが、本当にそれでいいのだろうか。もともと仲の良かった人との距離ができて、私ならなじめない。違和感があつて受け入れられない。表面的に「さんづけ」してもネットなど裏でいじめをしていたら、全く意味がないと思う。

私の名前の「あづき」はひらがなで単純だけれど、よくみんなに珍しがられる。この名前にはたくさん^の思いが込められている。小豆がよく使われるもの^と言えば「お赤飯」だが、これは、昔からお祝いやおめでたい時に食べるもの^の代表といえる。「あづき」には長女として生まれ

たことのお祝いと喜びが込められていた。お赤飯は祖父の好物でもあった。しかも父が料理の仕事をしていて、小豆料理も得意だったこと。

私がまだ母のお腹にいたとき、名前を付ける前からみんなが私のことを「豆ちゃん」と言っていて呼びかけていたという。「あづき」ではなく、「あづき」にしたのは画数にこだわって、縁起の良い方にしたということだった。「あづき」の私を先頭に、妹たちの名前は、「いづき」「うづき」となった。自分で言うのも少し恥ずかしいけれど、長女の私のように素直でいい子に育ってほしいという願いを込めて「あ・い・う」の順になった。名前一つにこれだけたくさん^の思いがあつたことを知ると、改めて自分の名前がいとおしく思えてくる。

でも、私のように自分の名前を肯定的に受け止めている人ばかりではない。さまざまな事情を抱えて苦しんでいる人もいることに気がついた。明音のように親の離婚が原因で、苗字が変わってしまった、「明るい」という響きに違和感があつて悩んでいる人。特に、彩瑛の家の事情が明らかになったとき、彼女の悲痛な叫びが、私の祖母の過去と重なり、胸が張り裂けそうになった。

日本で生まれ育つた祖母だが、私の祖母は韓国人だ。普段は日本名を名乗って暮らしているので周りからは日本人だと思われていたが、韓国人だと分かった途端に、周りの人の態度が変わったという。多感な年頃の中学時代は、いじめにもあつて辛い思いをしたらしい。経済的には恵まれていたけれど、心の傷は決して小さくはなかったという。私から見たら、声高にヘイトスピーチなどをする人の方がよほど心が狭く、心が貧しいと思う。偏見や差別からは憎悪以外何も生まれない。彩瑛の苦しみは、当時の私の祖母の辛さと同じだった。生まれた時から、韓国と日本^の二つの名前にはさまれて生きてきたということ。私も祖母の血を受

け継いでいるのだから当然韓国の血が流れていることになる。私は胸を張って堂々と言える。それが私のルーツだと。むしろ私は一生けん命生きてきた祖母を誇りに思う。私たちはみんな特別な一人一人だと思っ
ている。

「マイネーム」騒動が不思議な連帯感をもたらしたように思う。これ
がきっかけで、みんな自分の名前に真剣に向き合ったのだと思う。それ
は紛れもなく自分自身と向き合ったのと同じことだ。私自身もその一人
だ。今の私の名前が最高の名前だと、私は心から思っている。

自分の好きな名前を名乗るルールの、あのブックカフェに行ったら、
私は迷わず「あづき」と名乗るだろう。

受賞者のひとこと

私は、これまでも自分の名前について考える場面が少なくありません
でした。今回「#マイネーム」を読んだことで、自分の名前の由来だけでな
く、自分のルーツそのものに向き合うとても良い機会になりました。今ま
で語られなかった祖母の過去を詳しく知ることができ、祖母を誇りに思っ
て、一層強くなりました。同時に、自分のことを大切にして生きてい
こうという新たな決意も生まれました。この作文を書き終えたとき、自分
の中で何か吹っ切れたような清々しい気持ちになりました。

二年連続で「最優秀賞」という名誉な賞をいただくことができ、うれし
くて本当に夢のようです。小学二年生で入塾した私は、毎年この作文コ
ンクールに参加してきました。おかげで、本を読みながらいろいろなこと
を考え、表現していくことがとても楽しいと思えるようになりまし
た。先生も、「自分と向き合い、じっくり考えることが大切だ」と日頃か
らおっしゃっているのです。これからもたくさん読書をして思考を深め、
成長していきたいです。切磋琢磨し合えるセミナーの環境と、入塾以来
変わらない先生の熱いご指導に心から感謝しています。ありがとうございます。

対象図書名 #マイネーム

中学生の部・最優秀賞(中二)

人間関係は化学変化

美 並 颯



人と人の関係は化学変化だと思っている。
アナグラムを知らない科学オタクの健人は心
咲の気づきのおかげで取りもどしたノートに
貼りつけられていたメモに書かれた、「ヘリ
オンネウム-1」を解読することができた。

健人にとって心咲は偉大な存在だ。健人がど
こかへ行こうとしたり、何かをしようとしている時には心咲が隣りにい
た。心咲は科学に詳しくない。でもその分、知識が豊富だ。その知識で
健人が解けなかった謎を解き、健人を夢へ近づけていった。東京タワー
に虹を架けるといふ夢を叶えたのも心咲のおかげだと思う。

どれだけ自分が苦手だと思っていることがあっても、それを得意な人
がいたら苦手なこともできるようになる。だから人と人の関係は化学変
化だと思っている。化学変化とは、原子の組み合わせによって物質が他
の物質に変化する。私もこのような化学変化を経験したことがある。

中学一年生の時のクラスメイトだった友人は勉強はほぼ全科目できて
運動能力やトーク力が高い、なんでもできる人よりも優れている子だっ
た。私はいつもその子と楽しい学校生活を送っていた。最初はその子の
ことをとても感心していて、自分はこんな友人がいるから無敵だと勝手
に思っていた。でも人間関係は思っているよりもはるかに甘くはなかつ
た。少しづつ私はなんでもできる友人に嫉妬し始めてしまった。頑張っ
て努力して乗り越えた壁をその子はすぐに乗り越えられることが羨ましか

った。世の中生きている人ほぼ全員がすぐに物事を成し遂げることができず、努力していることは知っているし、その子も裏では努力していることも知っている。でも、その努力している姿を表に出さずにテストの点数がいつも高いと身の周りの努力している人たちを忘れてしまい羨ましく思ってしまった。それから数日間、友人と言葉を交わすことは減っていった。

空一面雲でおおわれていた空が突然晴れたある日、学校で一枚の数学のテストが返却された。このテストはいつも通りのテストではない。テストの点数で勝負をしている。相手はあの友人。数日前、友人から

「数学のテストの点数で勝負しよ！絶対に負けないから。」

と言われた。私は数学が得意なため自信があった。得意な科目だけは絶対に負けたくなかった。勝つために私は必死に勉強した。その結果満点だった。満点だったということは引き分けか勝ちのどちらかしかない。そして友人が、

「テストどうだった？私けっこう今回は点数高かったんだ。」

と話しかけてきた。互いにテストの点数を教え合った結果、私の勝ちだった。あの勉強が得意な友人よりも得意科目の点数が高いのはすごく嬉しかった。数日前の嫉妬はあの日の雲のように突然消えていた。友人は負けたことが悔しかったのか私に

「数学がわからないから教えてくれる？」

と頼んできた。数学を教えてあげるかわりに私は他教科を教えてもらうことにした。それから数ヶ月後のテストではお互いの苦手な科目の点数は上がった。相互作用によって、私達の関係などは変わった。

原子の組み合わせによって物質が他の物質に変化する。これと同じように人間も相手によって言葉遣いの変化したり、一緒に行動する人によ

って行う行動は変わる。そして、私のように自分が苦手な教科を得意とする人と勉強すると勉強方法が少しづつ変わり、苦手ではなくなっていく。健人も光平さんと出会って自分一人の限界に気づき一人で作業せず、力を合わせて虹を架けることに成功した。人間を変えられるのは人間で、変えてくれるのも人間。だから人と人の関係は化学変化なのだと思う。

この本で私は人間関係について学んだ。原子の組み合わせによって物質が他の物質に変化する化学変化。全ての物質が組み合わせるとは限らない。きつと組み合わせられない物質同士もあるだろう。人間も同じように意見などが合わない人もいる。そういう人と一緒にいてもいい関係は生まれない。いつも一緒に登校したり遊んでいる人たちは上手く組み合わせわさっている。自分が楽しい学校生活を送ったりするためには自分に合う人を見つけることが大切だと思う。そして、見つけた人と関わってもっといい方に自分を変えていく。これこそが人間の化学変化だ。だから私は今いる友人を大切にしながら、もっと人の力を借りて自分をより良くしていきたい。

受賞者のひとこと

自分の作品が「最優秀賞」に選ばれたことを知った時、あまりの嬉しさに母とハイタッチをしました。

この嬉しいにはただ選ばれたから嬉しいというだけではなく、自分の努力が報われたと思ったからです。

私は小学校一年生の三学期から週末はノートに日記を書いて先生に提出していました。

日記を書いたら必ず母に目を通してもらい誤字脱字やもっと良い言い回しなど文章を書くことについて沢山指導してくれました。

でも今回の読書感想文は母に目を通してもらわず、自分の力で書きまし

た。すると、結果は最優秀賞。きつとこの賞は昔から母と二人三脚で頑張ってきた証だと思えます。指導してくれた母や私の作品を選んでくださった方々、たくさんの方に感謝をしてこれからも文章を書くことを頑張ります。この度は、素晴らしい賞に選んでいただき本当にありがとうございます。

中学生の部・最優秀賞(中三)

それぞれにとっての虹

徳 永 安 希



研究者にとっての「本当の幸せ」とは何か。

主人公の健人は「化学オタク」で、何事も自分一人で解決しようとする性格だ。祖父の信二と共に、家に代々受け継がれてきた「東京タワーに虹を架ける」ための研究を続けて

いた。作中では、この研究を完成させるために様々な人物が登場する。その誰もが、誇りと情熱と信念を持った「研究者」だった。

私はこの本を読み進めるうちに、社会に生きているすべての人間が、何かの研究者なのだと思うようになった。「虹を架ける」研究に直接携わる健人や信二、そして協力者の光平。それぞれ、方向性は違えど化学を追い求める研究者だ。健人の友人であり、ユニークな発想で健人を助ける同級生の心咲は、読書好きな文学少女だが、同時に文学の研究者とも言える。心咲は、曾祖父の残した手がかりを理解できず悩む健人に、「アナグラム」を用いた暗号の解説を提案した。他にも、危機的状況で健人の心をほぐしたり、行きすぎた言動を制したりする場面が見られ

た。これは、文学を通して心咲が得た知識や想像力が元になっている。つまり、心咲の研究の成果が健人を救ったと言えるだろう。このように、一人一人のこれまでの努力を集結させて、虹の実現へと向かっているのだ。

目標の達成に必要な不可欠なのは互いへの協力だった。しかし、それぞれ譲れないものを持った研究者たちは、なかなか自分を曲げることができなかった。主人公である健人自身、「一人で研究を完成させる」ことに異常な執着をみせていた。では果たして、一人きりで偉業を成し遂げることが研究者にとっての真の幸せなのだろうか。先述したように、人間一人一人を研究者であるとするならば、それぞれに信念があるのは当然だ。だからこそ、現実世界でも人々は簡単には協力し合えない。

私も、健人と同じように、協力するために時間を要するのなら一人で終えた方が効率的であるという考え方を持っていた。だが、健人はその思考に囚われ、研究に必要な手助けを素直に受け取ることができなかった。その結果、研究は思うように進まず、大きな力となる情報を持つ相手すら拒絶してしまっていた。しかし、最後には心咲の言葉をきっかけに協力の必要性を実感し、今まで反発しあっていた人々すら結びつけるほどの協調性を持つようになる。では、はじめに健人が持っていた考え方はすべてが間違いだったのだろうか。私はそうは思わない。その場の課題を解決するために、一人で動く必要もあるだろう。協力することだけを求め、本題が疎かになっては元も子もない。しかし、人と人、それぞれ妥協できないものを持っている研究者同士で構成された社会において、自分の信念を貫き続けることはできない。どこかで相手と協調しなければ、社会の歯車は回らないのだ。私は健人の努力を見て、そのことを改めて感じた。つまり、人間、研究者たちにとって最も大切なことは

協力であり、一人きりで目標を達成することに固執しては、本当の幸せは得られないのである。

また、私はこれまで、自分の目指した成果が得られなかったとき、それまでの努力すべてが無駄になったように思っていた。「結果より過程、努力した事実が大切」とは言っても、所詮は綺麗事で、手元に何も残らなければ無意味だという考え方だったのだ。しかし、健人の祖父である信二の最後を読み、成果を得ることだけが幸せではない、目標を成し遂げられなかったことが不幸であるわけではないと思えるようになった。信二は健人と共に研究を進めており、健人と同じように信念を持った研究者だった。その信念とは「父から受け継いだ研究を汚したくない」というもので、自らの身内ではない光平が協力を申し出たとき、「他人と血が混じってしまう」とまで言うほどだった。そんな信二も、光平の真摯な姿勢や健人の願いから、他者と協力して研究を進めるようになっていき、虹の実現へ大きく近づいていく。そんな中、信二がこれまで目を逸らしてきた病気が悪化し、研究の道半ばで亡くなってしまったのである。だが、私はその最後を不幸だとは感じなかった。なぜなら、偽りであろうと彼に虹を見せ、彼の遺志を引き継ぐ者がいるからだ。健人が人と協力するようになるまでの過程で「自分はすでに人の助けを借りている」と気付く場面があった。ただの独りよがりでは研究は進展しない。どうせ理解してもらえないと思っていた「化学オタク」の自分は、決してひとりではない。そうやって孤独を否定することで、周りと協力し、信二の夢を継いだ。人と協力することは人生に必要不可欠であり、それによって人間としての、「人生」の研究者としての本当の幸せを見つけることができる。そのことを忘れずに生きていきたいと思った。

受賞者のひとこと

今回のコンクールの対象作品を見て、一番興味を持った題名が、「東京タワーに住む少年」でした。塾の先生の言葉で読書感想文を書くことになったのですが、最初は完成させればそれでいい、とあまり真剣に考えていませんでした。しかし、この本を読み進めるにつれて、中心となるテーマは何か、主人公はどう変わったのかなどの考えがあふれてきました。普段はファンタジー系の小説を読むことが多いので、科学を基本とした物語に入り込めるか不安だったのですが、主人公の思いに共感できる点が多くあり、理解しやすかったです。そのため、感想文も書きやすく、なぜ自分はこの本を読んで「面白かった」のかを深く考えることができました。私は気に入った本を繰り返し読むことが多いので、新しいジャンルや著者に出会いにくいのです。自分が詳しくない分野が題材の本に出会うきっかけになったので、コンクールに参加してよかったですと思いました。

第33回(令和5年度)全国読書作文コンクール

優 秀 作 品 集

令和5年10月 発行

発 行 公益社団法人全国学習塾協会

〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-39-2

TEL 03-6915-2293 FAX 03-6915-2294

E-mail info@jja.or.jp

